

4 後二子古墳石室の石材について

飯島 静男

石室をつくっている石材は、ほぼ同一種の輝石安山岩である。肉眼的には灰赤色粗鬆の地に径1~2mm内外の輝石および斜長石斑晶石が散在する、ごく普通の安山岩である。鏡下にては石基はややガラス質かと思われるが、酸化鉄による汚染のため、組織は明瞭でない。斑晶は石基に比して量が多い。有色鉱物はほぼ等量の普通輝石および紫蘇輝石からなり、共に自形ないし半自形を呈する。普通輝石には単純な双晶をするものがあり、まれに離溶ラメラがみられる。紫蘇輝石は普通輝石に比してやや小さく、透入双晶をするものがある。斜長石も自形ないし半自形を呈し、比較的単純な双晶をしているが、累帯構造はほとんど認められない。ほかに外形の不定な不透明鉱物がみられる。

上述の特徴を有する同種の安山岩塊は、後二子古墳西隣の微高地、道をへだてたさらに西の小丘、および七ツ石や産泰神社等、付近の流れ山の頂部ないし中心部に分布している。流れ山を構成する岩石と同種の安山岩は、当然赤城山頂付近にも分布が期待されるが、あえて遠方より運搬しなくても、現在地あるいは近傍にある石を用いたと考えて、岩石的には何ら問題ない。

なお、石室内の床面に敷かれている玉砂利状の円礫は、ほとんど安山岩である。種類はいくつかあって、色も灰色、灰赤色、暗灰色等いろいろあるが、同様の安山岩は粕川あるいは荒砥川にふつうにみられるものであり、近くの河川より採取したものと考えると、矛盾ない。

5 古墳出土の土製品と土製小像

— 人物埴輪の成立に関連して —

須藤 宏 (神戸市教育委員会)

1. はじめに

形象埴輪のほか、古墳上からは手のひら大あるいはそれよりも小さな手づくねの土製品が出土する。近年その報告例が蓄積されつつあるが、まだまだ少ない。資料の数量的制約のためあって、これまで土製小像に対する検討はあまり行われず、その性格はもとより、時期的な問題すらもはっきりしていない現状がある。

この小文では、管見ながらその集成を行い、その分布・要素・展開などについて概観する。さらに同時代における他の動物造形・人物造形である装飾付須恵器(1)の小像、さらに人物埴輪・動物埴輪との対比を行い、その関連についての見通しを述べたい。

なお、中実で小型の土製品の名称についてであるが、総称として「土製品」、そのなかで装飾付須恵器といわれるものの像のように他の造形に付着するものを「小像」とここではよんでおく。

この小文を書くにあたっては、岡村勝行・加部二生・木下亘・小林義孝・杉山秀宏・津野仁・中沢道彦・坂靖・古谷毅・山口明の各氏に御教示をうけた。記して感謝の意をあらわしたい。

2. 集 成

筆者がこれまでに知りえた古墳出土の土製小像・土製品は Tab. 13の通りである。(2)

これらの資料から判明することは以下の通り。

分 布

九州・四国・中国から東北部にかけて分布が認められる。報告されている資料の数は少ないが、埴輪の存在する地域においては普遍的な存在であろう。

種 類

- A：人物 男 [一物・みずらの表現のあるものはないが、性別不明のものほとんどは男であろう]
女 (21・30)
性別不明 (19・22・23・26・28・31・32)
- B：動物 鳥 (1・2・5・6・11・21・22・24・26・33・37)
鶏 (13・14・20)
馬 (12?・34・38)
犬 (3・13・27)
猿 (27)
猪 (12?・13・26・29・35)

魚 (16・18)
種の特定が困難な四足動物 (4・5・21・
25・36)

C: 器物

蓋 (7)
杵 (14)
刀 (14)
鏡 (12)
腕飾類 (15)
武具 (17)
什器 (8・10)
供物を盛りつけた高杯 (26)
舟 (5)
不明品 (5・6・14・18)

存在形態

- ①それ自体独立した造形であり、地面などの場におかれるもの (5・12?・13・14・21・34・38)
- ②支脚の先にとりつけられるもの
 - a 土製の支脚⁽³⁾ (16)
 - b 棒状の木製支脚 (7?13・20)
- ③土製の台の上につけられるもの (28・24?・32?)
- ④円筒埴輪につけられるもの
 - a 口唇部にはりつけられるもの (6?・25・26?・29?)
 - b 胴部外面にはりつけられるもの (26?・27)
- ⑤家形埴輪に付属するもの (8・10・11?・14?・37)
置かれる状態のはっきりしない資料が多いが、土製品のなかでもやや大型のものは単体、てのひらに収まるような小型のものは付属物であろう。
 - ①には動物・人物・供物を盛りつけた高杯がある。
 - ②の支脚は土製と木製の別がある。土製のものには魚があり、木製支脚には鶏がある。
 - ③には人物が確実にある。動物ははっきりしないが、その可能性をもつものがある。
 - ④には鳥・猪・四足動物・犬・猿がある。
 - ⑤には屋根の上にとまる鳥と、家の中の什器がある。
原位置を明らかにできるものは数すくない。墳丘上のおおまかな位置でいえば、埋葬施設の周辺にあるもの (5・6・8・13・14・21・33) と墳丘の裾部や造り出しにあるもの (2?・4?・5・7?・9・10・12・15・16・20・25・26・27・28・38) とがある。前者は古い資料が多く、後者は新しい資料が多い。時期的な問題である可能性が強い。

時期

人物・動物・器財の種類別に述べる。

人物は中期中葉から中期後半に集中して多くみられ、後期につづく。

動物は前期後半からみられ、中期そして後期に引き継がれる。

棒の先にさされる形態の鶏形土製品は2例あり、時期は前期後半 (13) と中期前半 (20)。

魚形土製品の時期は中期前半。

鳥は前期後半からみられる。家形埴輪の屋根などにとまるものと、そうではないものがあるが、その弁別を小像自体から行うのは困難が多い。そのなかで6の水鳥5羽は円筒埴輪の口唇部に貼りつけられていたと考えられる例である。中期初頭。26も同様のもので中期後半。

猪は前期後半に遡る資料 (13) があり、中・後期を通じてみられる。

馬は中期中葉から後半 (9・38) と後期のもの (34)。

犬は前期後半 (13)、中期 (3) と後期中葉のもの (27)。

猿は唯一例で後期中葉のもの (27)。

器物は前期から後期。種類によって流行の時期がかわりそうである。

動物埴輪・人物埴輪との共伴

土製品・小像と動物埴輪・人物埴輪が共伴する例としない例がある。

動物埴輪・人物埴輪の出現以前の2・6～8・10・13～15・18は当然のこととして共伴しない。

動物埴輪・人物埴輪の出現前後とされる中期中葉から後半にかけての資料のうち、共伴するものは1・9・19・26?・28・33・36・38があり、確認されていないものが5・16・21～24・29。両者を比較して見た場合、前者に新しいもの、後者に古いものが多いという傾向が認められそうである。

中期末～後期は、4・11・12・25・27・30～32・34・35・37がある。

人物形土製品・動物形土製品について

土製品であらわされる動物の種類と形象埴輪のそれとを比較すると、9のように蛸だの鳥賊だの変なものもあるが、これを魚類ということで括ることが可能ならば、ほとんど共通しているといつていい。今のところこれらひとつひとつの造形のもつ意味を推しはかれるまでの段階にないが、造形要素の共通性から、土製品と動物埴輪・人物埴輪と同じ意味が与えられていると考えてよいだろう。また、人形土製品の出現は前述したように人物埴輪の出現にやや先行するようだがほぼ重なり、時期的な展開も土製品と埴輪のそれとが

共通している。

ところが、そのなかで四足動物をかたどった土製品の出現時期だけが埴輪のそれとは異なって早い。

前期後半の13では、埋葬施設を囲む円筒埴輪列付近から犬と猪をかたどった土製品が出土している。また、中期前半の5は、四足動物と鳥をかたどった土製品が埋葬施設上の家形埴輪の周辺、およそ1mの範囲からまとまって出土している。ともに人をかたどった土製品は伴わない。

後述するような人物埴輪・動物埴輪と土製品との関連を考える立場にとって、問題となるのが動物形土製品の出現時期という点であるが、これに対する回答になりそうなのが、古式の家形埴輪はそのモデルを忠実に写すものであるという点である。10の家形埴輪は有名だが、8においても牀形土製品、さらに案・椅子・高杯などが家形埴輪に付属するものとして存在するという。このことが、動物形土製品の存在につながらないかという感じがする。屋根にとまる鳥を付加するように、そこで飼われる家畜を加えることによって生活の場たる家の具体性が一層たしかものになるのではないかと思われる。⁽⁴⁾

このように考えれば、鳥形土製品や古い時期の動物形土製品は、家の棟にとまる鳥、庭先にあそぶ家畜をあらわすものとして家形埴輪に一連するものと考えることができるだろう。

ただし、鶏形土製品については、すべて、竿を差し込むための穴があげられる点で他と異なっている。この形態からはすぐに鳥竿が連想される。竿の先にとまり時を告げる長鳴きをする姿なのかと思われる。大きさといい、設置の状況といい、他の動物形土製品と性格が違うことは容易に察しうる。

26では前方部上で供物を盛りつけた高杯の土製品が出土しており、16や18などで出土している。魚形土製品も供献された贅のひとつではないかと考えられる。こういった贅とでもいうべきものは、その出土位置が造り出しであったり、周湊内であったりして埋葬施設から離れた場所であることが注意される。

動物形の土製品はすでに前期の古墳にみることができのに対して、人物の土製品の出現は中期もおそらくはその中頃に考えることができる。しかも、人物埴輪の出現とくらべて見た場合、人物埴輪・動物埴輪との伴伴の項でみたように、それらにやや先行する可能性がある。技術的におとるがゆえに中空で大型の埴輪でなく、中実で小型の土製品となってしまったという

わけではないことは、21で人形土製品と共伴して立派な家形埴輪が出土していること、人物埴輪が共伴している例が多くあることをみれば明白であろう。

さて、人物埴輪出現以後も土製小像は残存し、人物埴輪と一つの古墳において共存する例もいくつか知られる。しかし、配置の状況を復元できる資料がないため、子細な点については明確でない。

28では中堤上の区画から人物埴輪とともに中実の小像（武装武人等）が出土しているが、そのなかに台上に足の部分が残っているものがある。この小像は装飾土器のようなかたちで台上に並べられたものと推測しうる。また、円筒埴輪の口唇部に小像を貼り付ける例として25がある。6・26も小像の下面に剝離痕が残り、同様のものではあったという。今回出土した27は犬と親子の猿がある。本例はそれぞれセミがとまるように円筒埴輪の側面にはりつけられている。このような装着状態は福岡県羽根戸所古墳出土の筒形器台につけられる動物など、装飾付須恵器のそれと共通するありかたである。ほかにどんな付け方があるのかと問われると答えに窮してしまうが、このような小像は、その形態・装着状態からも装飾付須恵器の直接的な影響を受けている可能性が強いだらう。

3. 人物埴輪と動物埴輪・土製品・

装飾付須恵器の小像

次に装飾付須恵器の小像と人物埴輪・動物埴輪との比較をおこない、さらに土製品の位置づけをおこないたい。

⁽⁶⁾ 眞壁葎子氏によれば、装飾付須恵器の小像の種類は、人物では、組み合わせ二人（相撲）・荷物運搬・踊るような群像・狩猟情景・性器露出（男女あり）・乗馬の男と手を前に差し出す女・鉢巻きをする人・二人の人物が重なるようなものがあり、動物では、鹿・猪・馬・犬・鳥・鶴？・いるか？おっとせい？・亀がある。

これに対し、須恵器の源流である韓国の陶質土器のそれはさらに多様で、銅鐸の文様と共通するような要素が多くある。このような要素をあらわしたものについては「性行為の表現をつうじて、豊饒な生産力を祈願したり、蛇・蛙の付着によって辟邪の意味をあたえ」る意味があり、「大切に保管しなければならない種子などの貯蔵容器かあるいは祭祀用の酒を醸造した土器であるかもしれない」という李蘭暎氏の解釈が正鵠を得ているだろう。⁽⁷⁾ 韓国で出土したこの手の土器は石室内に置かれる明器的なものであるのに対して、日本では

基本的に石室内には置かれず、墳丘の外面に置かれるものがほとんどであるという、機能の差異がそこに表されるモチーフの選択に通じているものと理解できる。

日本においてみられる装飾須恵器の小像の要素は、多少の出入りはあるが、埴輪のそれとほぼ共通しているとみてよい。ということはこれらの土器も古墳だけから出土しているという点とあいまって、ともに喪葬儀礼に関係した主題をあらわす造形であると考えてよいだろう。⁽⁸⁾この手の土器が渡来人の居住地方に偏在するということがあるにせよ、その要素は故地でのそれから選択がなされている。そして、その選択された要素は被葬者があの世での生活を営むためのものではなく、この世で行われる喪葬儀礼をあらわす。⁽⁹⁾

人物埴輪の出現と須恵器の出現は古墳や土器の編年観でのスケールでみれば同時期としてよいであろう。ほぼ最古期に位置づけられる須恵器窯である大阪府高蔵85号窯からの出土品に小像をつける筒形器台がみられる。⁽¹¹⁾このことは日本における須恵器の製作が始まった当初からこういった装飾の造形が存在したということであり、その起源は当然須恵器の故地である韓国に求められるということになる。

人物埴輪以前には見せるものとして人を造形した土製品はないという状況⁽¹²⁾からすれば、この時期に現れる人物埴輪というものは、その要素・出現時期の共通性からその祖形をこの時期に今來の技術として伝わった須恵器に見られる小像に求め⁽¹³⁾たくなる。その中間に土製小像が位置づけられるだろう。初期の人物埴輪が小型であることは人形土製品がその先駆的形態であるという推測を助ける。

器物の上に表現したものと異なり、外部に見せるという意識の下に大地におかれるものとして造形されるため、ごく短い期間のうちに祖形の中実の小像から中空の大型化した埴輪へ変化したと考えられるが、そこにはそれまで形象埴輪として存在していた器材埴輪・家形埴輪・鶏形埴輪・水鳥形埴輪など大型の造形を行った技術が発揮されたと考えられよう。

ただし、このような動物や人物をかたどった土製品は、人物埴輪が成立したのちも少数ではあるが引き続き製作され、両者が共存する例もある。人物埴輪の成立の重要な契機にはなったが、それが発展的に解消してしまったわけではなく、命脈を保ったことが知られる。その出土位置も人物埴輪・動物埴輪と同様の場所であることから、それらが、同じ意味をもって置か

れるのだという意識が引き継がれていたことを知ることができよう。

4. ま と め

少ない資料からの推論であり、今後の資料の増加によって修正が必要となる可能性が高いが、現状では土製の小像について以下のような見通しがたてられよう。

古墳出土の土製品は、いくつかの系統にわけることができる。

古墳時代前期には器物を実大に模した土製模造品と言うべきもののほか、家形埴輪に付属するものとしての器財や動物が存在する。家形埴輪に付属するものであるという属性から当然のことだが、埋葬施設の周辺におかれる。また、このほかに鳥竿と意義を同じくするだろう棒の先に装着される鶏形の土製品がある。

中期中葉の早い時期、すなわち須恵器や人物埴輪・動物埴輪の出現する時期に、埋葬施設上におかれるのではなく、墳丘の縁辺部にあたる位置におかれたり、そなえられるものとして人物や供物をあらわす土製品が出現する。この人形土製品は人物埴輪の出現にやや先行して出現した可能性がある。

装飾付須恵器の小像・人形土製品・人物埴輪と動物埴輪の要素は多少の出入りはあるものの、共通しているといってい。装飾付須恵器の小像は韓国の陶質土器のそれに系譜を求められる可能性が高いのに対し、土製品・人物埴輪の出自はあきらかでない。須恵器の小像の要素は韓国の陶質土器のそのうち、喪葬儀礼をあらわすものだけが特に選択されている。文化系統の共通性と造形要素の共通性、その背後にある思想・観念の共通性、さらに韓国からの文化波及の時期という状況証拠もそろっており、人物・動物埴輪の成立の直接の契機を装飾付須恵器の小像に求めることが可能となるだろう。

このような人物・動物をあらわす土製品は人物・動物埴輪の盛行以降も、少数ながら引き継がれ、以前と同様に墳丘の縁辺部に置かれる。

註

- (1) この文中で単に動物埴輪といった場合、古墳時代前期から存在する水鳥・鶏を表したものは除外し、人物埴輪と同じ時期にあらわれるものをさすことにする。
- (2) 形象埴輪に付属するものうち、家の屋根にとまる鳥・什器などは立論の必要上この表に入れたが、鷹匠や狩人に付属する動物であることがあきらかなものは入れていない。

- (3) 猪熊1979に依る。
- (4) そう考えると4でも出土している圓形埴輪の理解についてもうすし幅をひろげて考えることができるかもしれない。この形象埴輪については「屋敷地を囲う塀」とする(小笠原1985)ことで確定したかのような観があるが、そのほか、家畜を放し飼いにするための柵であるものが存在すると考える余地も出てこよう。
- ところで、家に付随する家畜と考える立場にとって気掛かりなのは、13で犬と猪が出土しており、これが新しい時期の動物埴輪の組合せと一致することである。再考してみたい。
- (5) ただひとつ年代の著しくはなれた例である橋築墳丘墓のものを例外として一応考慮のうちから外し、類例が複数認められるものをとると。
- (6) 真壁1988
- (7) 李1976
- (8) 岸本1975
- (9) 人物埴輪の意味については須藤1991
- (10) 神林1947・斎藤1969
- (11) 中村1981
- (12) 弥生時代の方形周溝墓からの木偶の出土が報じられているが、不明。
- (13) 人物埴輪の成立と裝飾付須恵器小像の成立とに共通の思想的な背景があるとする意見は、増田1987 208～210頁・229～230頁にみられる。

引用・参考文献

- 東 潮 1985『古代朝鮮の祭祀遺物に関する一考察 一異形土器をめぐって』『国立歴史民俗博物館研究報告』7 国立歴史民俗博物館
- 安藤 鴻基1974『千葉県木更津市畑沢埴輪窯址の調査速報』『古代』57 早稲田大学考古学会
- 松本浩一他1981『西大室遺跡群II』前橋市教育委員会
- 石山 勲他1883『塚遺跡I』福岡県教育委員会
- 猪熊 兼勝1979『埴輪 日本の原始美術6 講談社
- 李 蘭暎1976『신라시대 토우』(東1985からの孫引き)
- 岩橋 孝 [13. 香川県] 埋蔵文化財研究会1985
- 上田宏範他1961『桜井茶臼山古墳 附榑山古墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告19 奈良県教育委員会
- 上村 安生1985『21. 三重県』埋蔵文化財研究会1985
- 梅原 未治1931『桑飼村姪子山古墳、作り山古墳の調査(上)』『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』12 京都府
- 梅原 未治1933『桑飼村姪子山古墳、作り山古墳の調査(下)』『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』14 京都府
- 梅原 未治1935『河内寛弘寺の一古墳』『日本古文化研究所報告』第1 日本古文化研究所
- 大和久震平1972『桑57号墳発掘調査報告書』小山市教育委員会他
- 岡崎 晋明1984『大和の埴輪』榑原考古学研究所付属博物館
- 岡崎雄二郎1976『井ノ奥第4号墳発掘調査概報告』『考古学ジャーナル』120 ニュー・サイエンス社
- 小笠原好彦1985『家形埴輪の配置と古墳時代豪族の居館』『考古学研究』124 考古学研究会
- 金井塚良一他1987『討論 群馬・埼玉の埴輪 あさを社
- 神林 淳雄1942『裝飾付須恵器に就いて』『茶わん』133
- 岸本 雅敏1975『裝飾付須恵器と首長墓』『考古学研究』85 考古学研究会

- 北国新聞 1988『鶏形土製品が出土』11月2日記事
- 北武蔵古代文化研究会他1985『第6回三県シンポジウム 埴輪の変遷 一普遍性と地域性一』北武蔵古代文化研究会
- 久野邦雄他1976『斑鳩町瓦塚1号墳発掘調査概報』榑原考古学研究所
- 後藤 守一1933『上野国佐波郡赤堀村今井茶臼山古墳』皇室博物館学報第6 皇室博物館
- 後藤 守一1953『上野愛宕塚』『考古学雑誌』39-1 日本考古学会
- 小林 義孝1989『〔資料紹介〕寛弘寺5号墳出土傘形土製品』『泉北考古資料館だより』37 泉北考古資料館
- 小山 雅人1987『野崎古墳群の埴輪と土器と土製模造品』『京都府埋蔵文化財情報』25 京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 近藤義郎他1960『月の輪古墳』月の輪古墳刊行会
- 近藤 義郎1980『橋築遺跡』山陽新聞社
- 斎藤 忠 1969『わが国における滯人文化の痕跡』『日本歴史』251・252 吉川弘文館
- 須藤 宏 1991『人物埴輪のもつ意味』『古代学研究』126 古代学研究会
- 高崎市教育委員会1990『第8回 埋もれた古代の高崎』高崎市教育委員会
- 高橋美久二1991『京都府のはにわ』京都府山城郷土資料館
- 田島柱男他1974『八幡原遺跡』高崎市文化財調査報告第3集 高崎市教育委員会
- 辰巳 和弘1990『高殿の古代学 一豪族の居館と王権祭儀一』白水社
- 東京国立博物館1983『東京国立博物館図録 古墳遺物編(関東II)』東京国立博物館
- 長野県 1983『長野県史 考古資料編 全1巻(4) 遺構・遺物』長野県史刊行会
- 長野市立博物館1982『はにわの世界』長野市立博物館
- 中村 浩 1981『泉陶邑窯の研究』柏書房
- 西口 寿生1975『V 古墳』『平城宮発掘調査報告VI』奈良国立文化財研究所学報23 奈良国立文化財研究所
- 西田健彦他1991『舞台・西大室丸山』群馬県教育委員会
- 西谷真治他1959『金蔵山古墳』倉敷考古館研究報告第1冊 倉敷考古館
- 浜名徳永他1980『上総殿部田古墳・宝馬古墳』芝山はにわ博物館
- 埋蔵文化財研究会1985『形象埴輪の出土状況』埋蔵文化財研究会
- 真壁 霞子1988『裝飾付須恵器の小像群(一製作の意図と背景一)』『倉敷考古館研究集報』20 倉敷考古館
- 増田 逸朗1987 金井塚他1987所収
- 森 浩一1978『第三章 古墳文化と古代国家の誕生』『大阪府史』第1巻 大阪府
- 八木柴三郎1895『下野国下都賀郡羽生田ノ古墳』『東京人類学会雑誌』116 東京人類学会
- 山崎義夫他1984『天王壇古墳』本宮町文化財調査報告書第8集 本宮町教育委員会
- 山田 邦和1989『裝飾付須恵器の分類と編年 一裝飾付須恵器の基礎的研究一』『古代文化』41-8・9 古代学協会
- 大和 修他1981『割山遺跡』深谷市割山遺跡調査会
- 若狭 徹 1990『保渡田VII遺跡 保渡田古墳群に関連する遺構群』群馬町埋蔵文化財調査報告第27集 群馬町教育委員会
- 渡辺 昌宏1982『大阪府美園遺跡1号墳出土の埴輪』『考古学雑誌』

67-4 日本考古学会

和田正夫他1951『史蹟名勝天然紀念物調査報告第15 一快天山古墳
発掘調査報告書一』 香川県史蹟名勝天然紀念物調査
会

[追記] 脱稿後、亀井正道氏「浜松市坂上遺跡の土製品」(『国
立歴史民俗博物館研究報告』7 1985) 論文中に「土製人形」を
出土した古墳として福岡県春日市下白水大塚古墳・同筑紫郡那珂
川町観音山古墳群中原支群5号墳・同北九州市荒神森古墳・奈良

県天理市勾田塚古墳があげられていることを知った(すべての原
典にはあたれなかったが、古墳時代のものではないものが一部含
まれている)。また、千賀久氏『はにわの動物園II』(1991 樫原
考古学研究所付属博物館)に京都府加悦町後野円山1号古墳出土
の鳥形小像、さらに岡崎氏 1984に奈良市平城京左京三条二坊出
土の猪形土製品が紹介されているのを見落としていたことに気付
いた。不明を恥じる。

Tab.13 古墳出土の土製品と土製小像（含埴輪窯址出土例）

No	古墳名	時期	種類	出土位置	埴輪	文献
1	福岡県吉井町塚堂古墳	中期後半	鳥	(表面採集)	円筒・家・蓋・盾・冑・馬・人	石山他1983
2	香川県綾歌町快天山古墳	前期後半	鳥	墳丘裾(表採)	円筒	和田他1951
3	香川県寒川町神前八幡山古墳	中期	犬2?		円筒・家	岩橋1985
4	島根県松江市井ノ奥4号墳	後期初頭?	四足動物 不明品	後円部堀 表採	円筒・鳥・人物	岡崎1976
5	岡山県棚原町月の輪古墳	中期前半	四足動物4・鳥2 舟	後円部埋葬施設付近 造り出し	円筒・家・蓋・盾・冑・甲冑・冑形	近藤1960
6	岡山県倉敷市金蔵山古墳	中期初頭	水鳥5・不用品	後円部埋葬施設付近	円筒・家・蓋・盾・冑・甲冑・鶏・高 杯・冑形	西谷1959
7	大阪府河南町寛弘寺5号墳	中期前半	蓋	造り出し?(表採)	円筒・蓋・草摺・盾	梅原1935・小林1989
8	大阪府堺市百舌鳥大塚山古墳	中期前葉	案・椅子・壺・器台・牀	前方部埋葬施設付近	円筒・家	辰巳1990
9	大阪府羽曳野市誉田御廟山古墳	中期中葉	鯨・鯨・鳥賊・鯨・河豚	周濠底	円筒・家・蓋・盾・草摺・水鳥・馬	猪熊1979
10	大阪府八尾市美園1号墳	前期末	牀	周濠覆土中	壺形	渡辺1982
11	京都府福知山市稲葉山10号墳	後期前半	鳥2		円筒・家・馬・鳥・人物	高橋1991
12	京都府綾部市高槻町野崎3号墳	後期初頭	獣2(馬と猪?)	周濠	なし	小山1987
13	京都府加賀町蛭子山1号墳	前期後半	鶏・猪・犬	後円部埋葬施設付近	円筒・家・蓋・盾・靴・短甲・高杯	高橋1991・梅原1931
14	京都府加賀町作山1号墳	前期後半	鶏2・円板形・杵・刀	墳頂部埋葬施設付近	円筒・家	高橋1991・梅原1933
15	奈良県天理市櫛山古墳	前期後半	腕飾類	後方部	円筒・家・蓋・盾	上田他1961
16	奈良県奈良市ウツナベ古墳	中期中葉	魚他	造り出し	円筒・蓋・盾	西口1975・猪熊1979
17	奈良県奈良市平城宮東院地区		短甲・草摺			岡崎1984
18	奈良県斑鳩町瓦塚1号墳	中期前葉	魚5・円盤形4	括れ部	円筒	久野他1976
19	三重県津市藤谷埴輪古窯	中期後半	人	窯	円筒・家・蓋・盾?・鶏・人	上村1985
20	石川県加賀市坂坂山2号墳	中期前半	鶏2	周濠		北国新聞1988
21	長野県長野市長礼2号墳	中期後半	人・動物・鳥	墳頂部・墳丘斜面	円筒・家・盾	長野市1982
22	長野県更埴市土口將軍塚古墳	中期中葉	人・鳥	(表採)	円筒	長野県1983
23	長野県長野市倉科將軍塚古墳	中期	人	(表採)	円筒・器財・水鳥?・人?	長野市1982
24	群馬県赤堀町赤堀茶臼山古墳	中期中葉	鳥・人?		円筒・蓋・家・短甲・高杯・椅子・冑 形	後藤1933
25	群馬県前橋市上綱引4号墳	後期前半?	四足動物	周濠	円筒	松本1981
26	群馬県前橋市舞台1号墳	中期後半	人・鳥・猪 供物を盛りつけた高 杯	周濠 造り出し	円筒・家・盾・蓋・馬?・人?	西田他1991
27	群馬県前橋市後二子古墳	後期中葉	犬・猿	前方部裾	円筒・家・冑・盾・馬・人	本書
28	群馬県群馬町井出二子山古墳	中期後半	短甲着用武人・人	中堤別区	円筒・家・蓋・盾・壺・馬・犬・猪・人	後藤1953・若狭1991
29	群馬県藤岡市白石稲荷山古墳	中期中葉	猪		円筒・家・短甲	北武蔵1985
30	群馬県高崎市ボウス山古墳	中期末?	女子		円筒・家・馬・人	高崎市教委1990
31	群馬県高崎市若宮八幡北古墳	中期後半?	人		円筒・蓋・盾・馬・人	田島1974
32	栃木県壬生町羽生田茶臼山古墳	後期後半?	ひざまづく人?		円筒・家・人	八木1985
33	栃木県小山市桑57号墳	中期後半	鳥	墳頂部	円筒・盾・人	大和久1969
34	埼玉県深谷市割山遺跡第5号粘土 採掘坑	後期中葉	馬	粘土採掘坑	円筒	大和他1981
35	千葉県木更津市清見台A-8号墳	中期末?	猪		円筒	北武蔵1985
36	千葉県木更津市畑埴輪窯	中期後半	動物	窯	円筒・蓋・盾・壺・馬	安藤1974
37	千葉県芝山町殿部田1号墳	後期前半	鳥	括れ部	円筒・家・馬・人	浜名他1980
38	福島県本宮町天王塚古墳	中期後葉	馬2	造り出し付近周濠	円筒・盾・甲冑・蓋?・鶏・鳥・犬・ 猪・人	山崎他1984